

Rosenzweig P-F Study による精神薄弱児の人格的特徴※

一 谷 彊

Tsuyoshi ICHITANI : Concerning Personality Characteristics of Feeble-minded
Children through Reactions to Rosenzweig Picture-Frustration Study

Received January 13, 1964

目 次	
問 題 及 び 目 的	1
仮 説	3
仮 説 I の 検 証	3
方 法	3
被 験 者	3
手 続	3
結果及び考察	4
仮 説 II の 検 証	8
方 法	9
被 験 者	9

手 続	9
結果及び考察	9
仮 説 III の 検 証	11
方 法	11
被 験 者	11
手 続	11
結果及び考察	11
結論及び要約	13
参 考 文 献	14
Summary	16

問題及び目的

心理学的研究が、嘗て、部分的な精神機能を例えば記憶、言語、学習などの如く要素的に取上げて研究していた頃には、精神薄弱児の心理学的研究も亦、これに対応してそれらの精神機能を正常児との間に比較検討するというものが主体をなしていた。Woodrow⁵²⁾、Thorndike⁴²⁾、及びBurt⁴⁾等による抹消検査、重量弁別、音高弁別等に関する実験はこれに該当するものである。そしてそれらの結果に基いて、Pintner¹⁹⁾は、「精神薄弱児の精神発達は非常に遅いが、正常児の発達と質的には相異なるものではない。」と考えていた。

併しながらBinetが既に今世紀初期に指摘したように、「精神薄弱児と正常児との差は程度の差ではない。質の差である。」³⁾とするならば、上に述べたような要素的な接近の仕方だけでは精神薄弱児の十分な説明は期待できない。かくて、Lewin¹⁶⁾によって主張された人格の力学説が多くの注目を惹くに到った。即ち、彼によれば、精神薄弱児の人格構造は、分化の程度が低く、素材の性質が硬くて、課題場面や緊張状態に置かれたときの順応が困難で、いわば、適応的性質が全体として欠如していると考えられた。それ以後、

精神薄弱児の人格への接近と論争とは、彼の所謂“硬さ”(rigidity)に関する問題を媒介としているものを代表的に挙げることが出来る。Lewinに初まるこの“硬さ”という仮説的構成体については、その後、Werner⁴⁷⁾⁵⁰⁾⁵¹⁾やKounin¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾を初めとして、その他多くの研究者、例えば、Goldstein⁸⁾、O'ConnerとHermelin¹⁸⁾、Plenderleith²⁰⁾、SpitzとBlackman³⁶⁾、Stevenson³⁷⁾とZigler⁵⁴⁾⁵⁵⁾⁵⁶⁾等による研究の成果や理論を挙げることが出来る。このうち、特に注目値するものは、LewinとKouninの“硬さ”に対する論争に、Werner⁵¹⁾が、Goldsteinの頭部傷害兵士の知覚・思考・行動についての研究⁷⁾⁸⁾⁹⁾に示唆を得て、批判を加えたことにある。即ち、Werner⁵¹⁾は、内因、外因というような類型に対応して“硬さ”を説明すべきだとし、また、Goldstein⁸⁾は、「有機体が適切な方法で、環境に即することが出来なくなったときに生ずる

※この研究に際して、住田勝美教授の御指導にあずかり、資料については、山田恭子(桃山学園教諭)、三沢和子(近江兄弟社小学部教諭)及び村田昭代(茨木市養精中学校教諭)の三氏に協力して頂きましたことを感謝します。

ものであって、いわば、破局状態の防衛である。即ち、その人の能力を超えた作業に対する反応である。」と説いた。

免も角、Lewinの精神薄弱児の人格特性乃至精神機能の特異性に関する理論的な解明は、この方面の研究に大きな示唆を与えたが、それによって精神薄弱児の行動や人格のすべてが説明され得るか否かは研究の余地がある。即ち、Lewin等の実験の被験者として用いられた精神薄弱児は、ベルリンの補助学級から集められた6才～12才の魯鈍乃至痴愚級の精神薄弱児であって、所謂知能の差異のみを基準としたもので、それ以上の説明は付加されていない。即ち先に記述した、Binet³⁾のいう質的差異が看過されているところが批判の対象の大きな要因の一つとなっている。

こうした事実と、先に述べたGoldstein⁹⁾の研究とから、WernerとStrauss³⁹⁾ 40) 45) 46) 48)をはじめ、Gallagher³¹⁾等によって、脳損傷を有する精神薄弱児とそうでない精神薄弱児についての、視知覚・思考・言語反応・人格特性に関する研究が行われ、同じ精神薄弱児でも両者の間に可成りの相異のあることが認められ、同様のことが、Sarason³¹⁾やStrauss及びKephart⁴¹⁾をはじめ、その他の研究者^{5) 6) 44)}に依っても認められている。

このように今日では、内因性精神薄弱児と外因性精神薄弱児——これはStrauss^{38) 41)}による分類であるが、本研究では、これらは後述するように一応、Tredgold⁴³⁾のいう一次性及び二次性に、Lewis³¹⁾のいう低文化型と病理型に、また、Sarason³¹⁾のいう、雑草型と脳障害型に、更にYannet⁵³⁾のいう、先天性と出産時障害性及び後天性に略々対応するものとする——の如く、病因による分類を根拠として、精神薄弱児の人格的特徴を種々の側面からとらえようとする動向にある。そして、そうした研究の結果³¹⁾として、外因性精神薄弱児は、知覚に際し所与の場を体制化する最も基本的な図式、即ち図柄—素地関係が障害されていて素地反応が多く、また、固執的、常套的傾向が強いという点などで内因性精神薄弱児と区別され得るに反し、内因性精神薄弱児では、これらにおいて正常児と質的な差異はないことが示唆された。また外因性の者は、内因性の者に比して、思考様式は非一貫的で支離滅裂であり、且つ非常識的であり、衝動性、過激、短気、不潔などの人格的特徴を有するとされる。

このようにWernerやStrauss等は、知覚や思考に関する心理学的検査から、外因性か内因性かを定める手がかりを得ようとしているが、この手がかりが科学的に得られるか否かは未だ問題とすべき点も多い。例えばSarason³¹⁾は、両者の重複している部分が未だ多

こと、即ち、例えば、その確率度は非常に高いけれども、外因性の者が常に必ずしも素地反応を示すとは限っていないし、またその逆に内因性の者が図柄反応を示すとは限らないことなどが見受けられる如きことなど、また実験から導き出された結果は、所謂“反応”に関してであって、被験者としての“個人”そのものについてではないことに注目すべき必要性のあることを強調する。

一方、全体としての人格を把握する方法として、そしてまた、人格の力働性に接近する方法として、即ち、精神薄弱児をも“個人”として個人内に力働性を有するものと考えてそれを把握せんとする方法としては、投影法を代表的なものとして挙げる事が出来るが、精神薄弱児の人格的特徴に接近するために、投影法特にロールシャッハ・テストやT.A.T.などに依存する傾向はRorschach²¹⁾をはじめとして多くの研究者に見受けられる。ロールシャッハ・テストを通しての研究としては、その代表的なものとして、Beck²⁾、Sarason, S.B. 及び Sarason, E.K., ^{29) 30)} Werner, ⁴⁹⁾ Sloan^{32) 33)}等の成果を記述することが出来るが、必ずしも一貫した結果を示してはいない。併し少なくとも、被験者として用いられた精神薄弱児を内因性及び外因性に分類して実験した結果では、反応総数、W%, D%, dd%, Do%, S%, FM%, C%, F+%, 独創反応(O%及びO-%を含む)において差のあることなどが見出されている。T.A.T.を用いた実験は、ロールシャッハ・テストの場合より遙かに少なく、且つ、より一層、非一貫的な結果しか得られていない。^{1) 10) 15) 27) 28)}これは、T.A.T.そのもののテストとしての性質に由来するものであること、即ち、ロールシャッハ・テストに比してより多く言語的表現を必要とする処に、精神薄弱児への適用の限界を示唆していると思われる。その他、H-T-Pテストによる研究³⁴⁾なども見受けられるが、前二者の投影法に比すれば研究結果の記載は非常に少数である。

今迄、精神薄弱児の人格的特徴に関する研究を概観して来たが、最近の研究の動向として、一方では精神薄弱児に対する類型的な研究が進められ、他方ではそれ等各類型の精神薄弱児に対する人格への接近法として、実験的方法と、今一つは臨床的方法——ここでは主として投影法に依るものを言う——とに分つことが出来るのではなからうか。

本研究では、主として臨床的接近法により、精神薄弱児の人格的特徴を明きらかにしようとするが、これを類型的に内因性と外因性とに分ち、投影法の中でも、今まで余り研究されていなかったRosenzweig P-F Study (Children's Form)^{23) 57) 59)}を適用して、

精神薄弱児の類型による人格的特徴に接近しようとする。

P-F Studyによるこの方面の研究¹⁷⁾³⁵⁾⁵⁸⁾は、極く僅かである上に、組織的、体系的な研究としては纏まったものが見受けられない。しかも、Rosenzweig²⁵⁾⁶⁰⁾が強調するように、個人を个性的事象界 (idioverse) として、その個体内の力働性 (idiodynamics) を重視して、全体としての人格 (personality as a whole) に接近しようとするれば、従来の研究のように、精神測定的 (psychometric) な方法による個体間 (inter-individual) の比較に依存するのでは不充分であって、個体内 (intra-individual) の精神力働的な関係 (psychodynamic relationships) に注目せねばならぬ。こうした人格の力働性を把握するための方法として、考案されているP-F Studyは、欲求不満事態においてそれが最もよく示されることに着目している点で研究の価値があると予想される。しかも Rosenzweig²⁴⁾が強調するように、P-F Studyには、精神測定的なテストでいわれるような項目の同質性 (item homogeneity) や特性の一般性 (trait generality) に欠如しているが、そうであってこそ、個体内の力働性をより適確に把握できること、及び、投影法の信頼性や妥当性についての研究には、精神測定的なものでなく、その独自性に対応した研究方法の必要であることが示唆される。

このような見地から、P-F Studyを通じて精神薄弱児の人格的特徴を特に内因性及び外因性に分類して、——ここにいう内因性、外因性は先に記載した研究者の類型に夫々対応するものとして取扱う——その反応の特色から、人格的特徴を捉えようとするものである。

仮説

如上の目的を達成するためには、凡そ次の如き仮説を明らかにすることにより、初めて目的を究明し得たと考えられる。しかもこれまでのP-F Studyを用いてのこの方面の研究においては、以下に記述する仮説の検討は充分であるとは言いがたい。従ってここに記述する仮説の検討なしには、P-F Studyの精神薄弱児に対する適用に制限と限界を必要とすることになるだろう。

〔仮説Ⅰ〕 Rosenzweig²³⁾の指摘しているように、P-F Studyの児童用は、大体4才～13才までの子供に適用し得るものであるとすれば、精神薄弱児に於いても亦、精神年令 (M.A.) が4才程度以上に達しているものは適用可能であろう。勿論、ここに意味す

るものは、正常児に於いて4才の者と、精神年令4才の精神薄弱児とが同じ人格的特徴を有することを暗示したり、この両者が一義的に対応した精神機能を有することを示唆するものではない。

〔仮説Ⅱ〕 仮説Ⅰが明きらかになり、従って適用可能な最低の年令が判明すれば、正常児と精神薄弱児との間には、P-F 反応に於いても相異が見られるであろう。即ち、精神薄弱児に於いては、従来の研究の示唆するように、人格的特徴が正常児のそれとは異っているのであるから、P-F 反応を通じてみた精神薄弱児にも何等かの相異があるだろう。換言すれば、人格に於いて、正常児とは異った歪みを見ることが出来るだろう。

〔仮説Ⅲ〕 仮説Ⅱが検証されるとすれば、精神薄弱児の中に於いても亦、その類型の相違に依存して、P-F 反応の特徴に相異が見られる筈である。即ち、内因性 (低文化型、先天性、または雑草型) 精神薄弱児では比較的正常児に近いプロフィールを暗示するが、外因性 (病理型、後天性、または脳障害型) 精神薄弱児ではこれとは異った、より歪みの大きいプロフィールを暗示するであろう。

以上の3つの仮説に照明を当てることが本研究の具体的な目的となる。

仮説Ⅰの検証

方法

被検者：京都市公立小学校6校の特別学級の精神薄弱児73名であって、これらの児童の生活年令 (C.A.) 及び精神年令 (M.A.) の分布は第1表の如くである。精神年令は、P-F Studyの実施に先立って行われた知能検査 (鈴木・ビネー式) によって与えられたものである。

第1表 被験者のC.A.及びM.A.による分布

年 令	2才台	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
C.A.による頻数					3	5	5	13	10	24	11	1	1	73
M.A.による頻数	6	10	14	11	18	10	4							73

手続：

(i) 各学校に於いて、児童が平生慣れている室で個別に面接してP-Fを実施。

(ii) 教示の与え方は一応 Rosenzweig の指示している通りとする。

(iii) 実験目的に適合した条件の設定

(a) 精神薄弱児では各欲求不満場面の理解乃至把握力に乏しいと考えて、暗示や誘導にならない程度に場面の説明を具体的に述べる。

(b)併し、P-F Studyに於いて最も注意を要するのは、“人物の関係を明きらかにするか否か”の問題である。一般には、人物の関係を明示せず、従って自己検査を相手に起させることは出来るだけ避けるのを建前としている。精神薄弱児の場合は、反応に対する自己検査は兎も角として、個々の被験者を具体的に理解し、その人格を力働的に解釈しようとするれば、テストにかかることを前提とすべきである。そのためには、精神薄弱児に対しては、場面に具体性を持たせ、人物の関係を具体化して、反応の容易なようにすべきかも知れぬ。しかしRosenzweigのいうように、一方において場面的決定要因(situational determinants)を絵によって保持しつつ、しかも他方においては人物の表情などが排除され、出来るだけ場面を曖昧にすることにより、即ち場面の曖昧さ(ambiguity)を維持することによって、反応の自由度、分散度を高めるように配慮されている。しかも、精神薄弱児に対するP-F Study実施の吟味が充分なされていない段階でもあり、且つ、本研究の目的からすれば、正常児と同様に実施し、P-F Studyの精神薄弱児への適用可能性を検討したいのであるから、人物の関係を明示しないこれまでと同様の方法に依った。

(c)教示の理解または、検査への適応を照合するのには検査用紙の練習用場面を使用。その際解答法が理解出来る様、繰返し練習を行うが、それでも不十分の時は各場面毎に2〜3回の場面の説明を繰返し行うことにする。

かくして、(a)(b)(c)の条件によれば、例えば場面1ならば、「(右の子供を指して)この子がお菓子か何かないかと思って戸棚の中を探していたら、(左の人を指して)この女の人が『お菓子は兄さんにあげたからもうひとつありませんよ』といいました。さあ、この子はその女の人に何と言うでしょう。」と教示し、人物の名称や具体的性質などは検査者からは明きらかにせぬ様に配慮されている。若し、回答のない時は、この程度の具体的説明を2〜3度繰返し、それでも無

応答の時は、反応のないものと見做す。

(d)時間制限、即ち反応に要する時間的制約は加えない。

(e)被験者が文字の読み書きの可能か否かに拘らず、全て統一して、個別的に口問口答とする。

(iv) 反応語の整理に際して、曖昧な反応や、場面の誤認や無応答の場面の無いことを確認した場合に、更に、その場で、答える立場の子どもを被験者自身に置き換えて反応させる——即ち、「あなただったらどう答えるか」というが如きもの——ことも試みた。反応語の整理に当っては、Rosenzweigの言うように客観的に語義的解釈(Semantic interpretation)を行うべきだが、精神薄弱児の場合、言語による表現力に乏しく、且つ、表現される言語数も少ない上に、生活行動空間の狭小や経験の貧弱なども加わって、検査者が反応語の評点に困惑する可能性も予測されるので、上に述べた方法を多少考慮した。そうすることにより、反応語の内容、動機を知り、その背景にある元型としての心理学的意味、反応の質的傾向を確め、反応を明確化しておく必要があると判断したからである。併しこの結果は、あくまでも参考に供するに止めた。

(v) 上述の基準で評点した上、場面の理解が可能であったと見做し得るか否かを、学級担任により判断を請うた。また、各場面に対する反応の動機や結果の解釈が、各被験者の日常生活に於ける行動と対応しているかを尋ねることにより反応の妥当性を一応吟味して置いた。

(vi) かくして、テスト実施可能と不可能との判断基準は、24場面中17場面以上に反応し得たか否かに依った。これは、検査時から判断して、全場面中約70%まで反応し得れば、教示及び反応の方法の理解に成功したとみたことによる。

結果及び考察

被験者37名に対するP-F Study実施の結果、実施可能であった者は47名、残りの26名は不可能と判定され

第2表 P-F Study実施結果のC.A.及びM.A.による分布

年 令	2才台	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
C.A.の頻数					3	5	5	13	10	24	11	1	1	73
実 施 司 能						2	3	9	6	18	7	1	1	47
実 施 不 司 能					3	3	2	4	4	6	4			26
M.A.の頻数	6	10	14	11	18	10	4							73
実 施 司 能			7	10	17	9	4							47
実 施 不 司 能	6	10	7	1	1									26

た。即ち、年令や知能の如何を問わず、実施可能が64%、不可能が36%であって、実数による χ^2 -検定の結果は1%水準で有意な差を以て、実施可能と見做し得る者の方が多かった。その詳細は第2表の如くである。この結果から見られるように、実施不能者が、C.A.

第3表 M.A.による全場面の理解度

M. A.	3才台以下	4	5	6	7	8
被験者数	16	14	11	18	10	4
期待反応語数※	384	336	264	432	240	96
有効反応数	0	166	224	393	216	93
有効反応率	0%	49%	85%	91%	92%	97%
誤認率	0%	8%	41%	4%	0%	2%
無答率	100%	43%	11%	5%	8%	1%
全場面中の理解場面数(平均)	0	11.8	20.5	21.8	22.1	23.3

(註)期待反応語数は、全場面数(24場面)に被験者数を乗じたもの

では6才台から12才台まで可成り広い年齢範囲に亘って、しかも一様に分散して見られるのに対し、M.A.では4才台以下に集中しているという事実である。即ち、C.A.では12才になっても尚11名に対して4名も不能者があり、8~11才あたりでも矢張り30~40%の不能率を示している。然るにM.A.では、5才台までは殆ど皆無といっている程に、実施可能であるが、4才台になると、5才との間に大きな断層がみられ、これを境界線として50%の不可能率を示し、3才以下では既に1名も可能者はない。かくして、M.A. 4才と5才とを境にしてP-F Studyの適用可能か否かを予期することが出来ることが示唆された。

斯くの如く、M.A.を基準にしてP-F Studyの適用可能であることを支持し得るかどうか。この点は更に考察を要すると考えられる。適用可能の問題は、場面の理解度に依存していることは予測するに難くない。従って、全場面の理解度を検討するため、M.A.に基いて有効反応数(実際に場面を理解して反応し、従って

評点も可能であった数)を求めてみると第3表の通りである。ここで有効反応率とは、期待し得る反応語数に対して、場面への誤認(場面のとりちがえ、場面への勝手な解釈、フラストレーションを起していない場面及び場面の説明に止まるもの)及び無応答を除いた、所謂有効反応数の割合である。その結果、全年令を通じて統計的に有意な差を以て、M.A. 3才台以下では全部無効反応であり、M.A. 4才では49%、5才以上になって初めて85%から90%以上の有効反応率が見られる。このことから、M.A. 4才と5才との間にこのP-F Studyの適用の限界または困難性が暗示される。これを理解場面数によって示すと、M.A. 4才では平均11.8場面、全場面中約半分程度しか理解出来ず、従って反応が有効でないことを示している。

上に吟味したのは、全場면을纏めてのものであったが、このように、M.A. 4才と5才とを境界線として場面の理解度に大きな差のある事実は、特定の場面の理解の困難性に依存するものであろうか。若し、そうであるとすれば、この種の特定場面について検討の余地を示唆することになる。Rosenzweig⁵⁹⁾は、P-F Studyに選択された場面は日常誰でもが遭遇するような欲求不満場面であることを述べているのみで、理論的に彼の考えた、欲求不満を惹き起す原因²²⁾との対応はなされていない。そこで、M.A. 4才と5才とで、場面の理解が不能であったものを場面別に検討して、これが特殊な場面の困難性に依存せず、分散的に一様に場面理解に障害があるかどうかを明きらかにしてみる必要がある。第4表は、M.A. 4才と5才とに於ける各場面の無効反応(場面の誤認及び無応答)の頻数分布を示したものである。これによると、無効場面の分布は、M.A. 4才では場面4。(困ったわね。その自動車、私にはなかせないわ。)

第4表 M.A. 4才と5才に於ける場面別無効反応の分布 N {M.A. 4才=9名
M.A. 5才=10名

M.A.	場面 無効反応数	場 面																								
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
M.A.	誤 認 数		2		1	1	2	1	1	1	1	1	5	1	1	1		2	2				1	1		
4才児	無 答 数		2	1	3		2	1		1					2		2			4	2	2	2		1	
	無効反応数		2	1	5		3	2	2	1	2	1	1	1	5	3	1	3		2	6	2	2	3	1	1
M.A.	誤 認 数		1					1	1	1				4												
	無 答 数		3				1		1																	
5才児	無効反応数		1	3			1	1	1	2	1			4												

(註)M.A. 4才で14名中5名、5才で61名中1名が全場面に、無効反応を示したが、これは、分散度をみるために除かれている。

は場面4。(困ったわね。その自動車、私にはなかせないわ。)と場面17(出かけるから、寝て留守番していてね。)以外の22場面に亘っており、M.A. 5才では、僅かに8場面であって、この間には、統計的に有意な差が見られた。この事実から、先に疑問としていた特定場面の理解

第5表 M.A. 5才以上の精神薄弱児の場面別有効反応率 (%) N=43名

場面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
有効反応率	97.7	100.0	83.7	100.0	100.0	97.7	86.0	86.0	95.4	93.0	95.4	93.0
誤認率							7.0	7.0				
無答率	2.3		16.3			2.3	7.0	7.0	4.6	7.0	4.6	7.0
場面	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
有効反応率	86.1	95.4	100.0	86.1	97.7	100	90.7	93.0	100.0	100.0	100.0	100.0
誤認率	9.3	2.3		4.6	2.3		9.3					
無答率	4.6	2.3		9.3				7.0				

の困難から来る無効反応に依存していることは否定され、欲求不満場面が全体として理解しにくかったり、誤認したり、または、欲求不満に無関係な反応を示していることがうかがえる。併しながら仔細に吟味してみると、正常児の場合にも、比較的誤認や無応答の生じやすい場面3（時間中におしゃべりして残されたが、本当は君にしゃべる積りはなかったんだ。）場面13（今度こそ取っている处をつかまえたぞ。）及び場面16（あなたのボールをとったりして、この小さい子はいけないわね。）などでは、矢張り無効反応数が多い傾向がうかがえる様である。今これをM.A. 5才以上の精神薄弱児43名について各場面有効反応率をみると、第5表のようになり、また、M.A. 4才の精神薄弱児（14名）と、M.A 5才の者（11名）とを第5表

と比較するために同じく整理してみると、第6表の如くなる。第5表からは、M.A. 5才以上の精神薄弱児に於いては、場面3（時間中におしゃべりして残されたが、本当は君にしゃべる積りはなかったんだ。）、場面7（あなたは悪い子ね。うちの花をつんだりして。）、場面8（あんたったら私の一番よいお人形をこわしたのね。）、場面13（今度こそ取っているところをつかまえたぞ。）、場面16（あなたのボールを取ったりして、この小さい子はいけないわね。）及び場面19（また、寝小便したのね。小さい弟より駄目じゃないの。）に於いてやや場面理解の困難が示唆される。これらの場面の中、場面3, 13及び16場面は、先に記述した様に正常児においても場面の誤認の生じ易い場面であるが、これら3つの場面に加うるに M.A. 5才以上の精神薄

第6表 M.A. 4才及び5才の精神薄弱児の場面別有効反応率(%)

M.A. 4 才=14名, M.A. 5 才=11名

[illegible]

弱児において誤認や無答の生じる場面は、総じて、欲求不満を惹き起こさせる原因者(frustration agents)が、例えば、場面13などの如く、子どもをつかまえている大人に認知されるか、逃げて行く子どもに認知されるかの如く、その何れかに認知される可能性の強い場面において、誤認や無応答が多い傾向にある。場面3にしても、フラストレーション・エージェントを、しゃべりかけて来た子どもと認知するか、或は、残した教師に認知するかに依存するし、場面16に於ても矢張り、それが、ボールを取った子どもと認知されるか、側にいる母親らしき人と認知されるかに依存する。尤も、場面16の場合は、相手から自分がとがめられていると認知することによって生じる誤認も多い。同様に場面7に於いても、花をつんだことをとがめている女の人と受取るか、花そのものに受取るかによって反応が変わる。場面8に於いても同様であるし、場面19では、矢張り、フラストレーション・エージェントが、とがめている女のひと、弟とのいずれかに認知され易い。この様に誤認や無応答の生じ易い場面は総じて、フラストレーション・エージェントを何に受取るかによって、反応が変わったり、誤認が起り易いし、またそのことによる当惑の故に、無応答が生じ易い。加うるに、精神薄弱児では、生活経験の貧困や、それに起因する視野の狭小、興味の偏重も亦その原因と見做してよいのではないだろうか。

そこで適用可能の限界として予想される M.A. 4 才台と 5 才台との間では、この場面別有効反応率は如何様になっているであろうか。第 6 表に見る如く、M.A. 5 才の精神薄弱児では、多少の齟齬はあるにしても、一般的には、精神薄弱児一般（即ち、ここでは M.A. 5 才以上の精神薄弱児を云う）と比べて理解の困難な場面は略々対応していると見て良いだろう。然るに、M.A. 4 才の精神薄弱児では、既に第 4 表にも見られるように、そしてまた第 6 表に示されるように、有効反応率が 50% 水準又はそれ以下に落ちる場面が圧倒的に多くなっており、むしろそれ以上の有効反応率を示す場面は殆ど見受けられず、M.A. 5 才の精神薄弱児に比して、有効反応率は遙かに低く、従って理解可能な場面が極めて少数に限定されていることがうかがえる。特に殆ど理解不可能と見られるのは、場面 3, 13 及び 19 で、これ等は何れも上述の様に、フラストレーション・エージェントが限定され難いことが、場面の理解をより困難にさせていることを証拠付けているのではないだろうか。斯くして、M.A. 4 才に於いては、場面理解の困難性が、特定場面に制約されていることによって生じるだけではなく、全体的に理解に障害を生じることが暗示された。

ここで、M.A. 4 才の精神薄弱児の中から、反応語の内容を補助的な意味で一瞥してみよう。被験者によって、多少の差異はあるが、概して“泣く”、“怒る”、“あかん”（駄目!! の意味），“いやや”（嫌だ!! の意味）等の如く、反応様式が非常に単純化されて来る。これ等の反応をみると、言語的表現力に乏しい結果ともみられるが、それと同時に、場面を具体的に認知する能力に欠けているために、フラストレーション・エージェントが誰であれ、都合が悪くなれば泣き、立腹し、拒否するということに、情緒的表出が関与してくることが考えられ、未分化な表現しか出来ず、従って行動一般に於ける未分化性がほめかされている。他方、ここで疑問になることは、各場面で人物が比較的抽象化されているために、場面理解が困難なのではなからうかという点である。これを確めるために、教示の際、「この子だったら」とか「この子は」と云わずに被験者自身の立場に置き換えてみると、即ち、「あなただったら」と言い換えると、先に回答不能の者も或る程度の回答が可能であった。例えば場面 6（お前の様な小さい子は遊んでやらないよ。）で、“僕(私)だったらどうする?”と質問すると、“僕、遊ばへん”(遊ばないの意)と云うことが出来る。また、場面 22（あなたは遅刻です。）に対しては、“僕、遅刻したこと無い”と回答するなど、人物の抽象化によって、自己の投影が困難になって来ている事実がうかがえる。

さて、斯くの如く、M.A. 4 才と 5 才の間を適用可能か否かの限界とみることにについて、精神薄弱児の場合、他に予想される原因があり得るかどうかを考えて、病因による差が見られるかどうかを検討してみた。第 7 表はそのことを示したものである。この表に見られるように、C.A. によって病因別に分類して、適用不能者の頻数に有意な差がみられるかどうかをみた結果は、統計的には意味のある差を見出し得なかった。M.A. について分類したものについても同様である。更に、適用不能の限界とみられる M.A. 4 才の精神薄弱児について吟味してみた結果も、何等有意な差を示さなかった。かくして、C.A. 別によるものも、M.A. 別によるものも共に、内因性、外因性の差は見受けられないし、また、年令の高低に於いても、C.A. 及び M.A. の如何を問わず同様の結果が示され、不能者が内因性、外因性に分散して見られる。従って、病因と適用不能との関係は独立であることが首肯される。

ここでも亦、補助的な意味で、次のことを吟味した。即ち、このように、欲求不満場面の理解が困難であった被験者が、何故そうであったのかの問題である。各被験者の理解困難の原因を追求してみると、担任教師により以下のことが判明した。即ち、M.A. 5 才以上の者の中 3 名は、他の精神薄弱児に比して I. Q.

第7表 C.A.及びM.A.による病因別適用不能分布

(a) C.A.による病因別適用不能者分布

C.A.	不能者数	病 因			
		内 因	外 因	内 因	外 因
		家族性	不 明	脳障害	不 明
12	4		2	2	
11	6	1	1	4	
10	4		3	1	
9	4	1		2	1
8	2		2		
7	3		1		2
6	3			2	1
計	26	11		15	

$$\chi^2=0.692 \text{ (有意差なし)}$$

註①ここで、被験者数が実数と対応しないのは、不能者のみについて見ていることによる。但し(c)表は実数と対応する。

③病因の有無その他、医学的診断は京都市児童院の医学者による。

③P-F Study適用不能の限界は方法の手續(vi)に記載した基準による。

が可成り高いが、性格的なものに帰因して、応答出来ぬ者達であった。M.A. 4才でも、興奮性で落ち着きがなく、検査者の教示を十分に聴くに到らない者が3名いた。特に注目されるのは、言語障害のために、言語表出の充分に出来ない者が可成り見受けられたことである。以上の様に種々の原因で、各場面への反応を未完成に終らせているという事実が見出された。しかもM.A. 4才程度ではその傾向が一層顕著になることが示された。この事は、反応語の内容を補助的に検討した際にも述べたように、場面の理解が困難で数回質問したり、被験者自身の立場に置き換えても反応出来ないという事実も亦、M.A.が低くなる程著しかった。このように種々の要因によって、場面の理解が困難にされているとしても、M.A. 4才では、場面の直接的理解にまでいかずに、反応している被験者の多いことがこれまでの証拠によって実証された。このような見地から、少なくとも精神薄弱児に関しては、M.A. 4才以下の児童にP-F Studyを適用することには無理のあることが明きらかとなった。

要するに、適用可能の段階を、場面の理解度によって考察していくと、M.A. 5才及びそれ以上は適用可能、M.A. 4才では、半ば理解し、半ば理解不可能な段階で、M.A. 3才以下の全く適用不能な段階との移行段階と見做される。且つ、病因によって差のないこ

(b) M.A.による病因別適用不能者分布

M.A.	不能者数	病 因			
		内 因	外 因	内 因	外 因
		家族性	不 明	脳障害	不 明
7	1			1	
6	1		1		
5	1			1	
4	7		3	3	1
3	10		3	4	3
2	6	2	2	2	
計	26	11		15	

$$\chi^2=0.731 \text{ (有意差なし)}$$

(c) M.A. 4才台に於ける病因別不能者分布

適用の可否		病 因			
		内 因	外 因	内 因	外 因
		家族性	不 明	脳障害	不 明
可能者数	7	1	4	2	
不能者数	7		3	3	1
計		8		6	

$$\chi^2=0.250 \text{ (有意差なし)}$$

とが示唆されているので、M.A. を指標にして、適用可能範囲をみても良いだろうと考えられる。

かくしてRosenzweigが云うように、P-F Study児童用の適用範囲は4～13才とされているがその下限域である4才については、一応適用を見合わせた方が妥当のように思われる。併しながらRosenzweigの指摘した適用範囲は、少なくともその下限域については左程誤ったものではないと考えられる。尚ここに付言しておかねばならぬ点は、場面の理解可能か否かの判定基準として、先にも少し触れた様に、言語障害による場合もあったが、これについては担任教師による示唆を得て、出来得る限り、身体的理由による言語表出の困難性を場面理解不能と区別するよう配慮がなされたことは云うまでもない。次にM.A. 4才以下を適用不可能としたことは今回の研究に関する限り精神薄弱児に限定して云えることであって、正常児の場合には、多少とも事態が異なるかも知れぬが、M.A.による適用可能の限界からみて、正常児についても概ね同様のことが云えるのではないかの推測は可能である。併し更に今後検討を加えなければ明確な証拠は現在の処持合わせていない。

仮説Ⅱの検証

これまで記述して来たところによって、仮説Ⅰはほぼ妥当であることが立証された。かくして、精神薄弱

第8表 M.A. による被験者の分布

群	M.A.	5才	6才	計	I. Q.		
					分布範囲	M	σ
精神薄弱児群		17	28	45	40~74	60	9.3
正常児群		12	20	32	97~121	105	8.2

$\chi^2=0.0006$ (有意差なし) $t=21.676$ (0.1%水準で有意)

児に対しても亦、全面的ではないが、P-F Studyの適用が可能であることが証明されたので、既に述べた仮説IIの検討を行うことにしたい。即ち、仮説IIとは、正常児と精神薄弱児とのP-Fに対する反応パターンの比較検討であって、その結果、精神薄弱児に於いて、より大きな歪みが見出されるのではないかとの仮説の検証である。

方法

被験者：京都市公立学校特別学級の精神薄弱児の中、M.A. 5~6才の者 (M.A. を5~6才に選定したのは、仮説Iの検証の結果、M.A. 5~6才ではP-F Studyの適用が可能であることが明らかとなったからである。) 45名 (これは、先に仮説Iの検証に使用した被験者に更に20名追加した。) 及び、正常児群 (即ち、統制群) も同様にM.A. 5~6才で京都市内幼稚園児 (鈴木・ビネー検査による) 32名である。両群ともM.A. によって統制されている理由は、C.A. よりも、M.A. に依存する方がP-F Study適用の結果としては仮説Iの検証にみられるように適用可能の者が多かったことによる。このことは特に精神薄弱児に於いてそうであったこと、及びM.A. 5~6才の者が精神薄弱児において比較的多く、正常児と比較検討するにも適切と思われたことによる。正常児及び精神薄弱児のM.A. による分布は第8表の如くである。知能指数では統計的に充分に有意な差が認められたが、M.A. に関しては有意な差を認めることは出来なかった。

手続：正常児群並びに精神薄弱児群ともに、仮説Iを検証する場合の方法と同様である。

結果及び考察

両群にP-F Studyを実施した結果は第9表の通りである。

(i) GCR%について

正常児群と精神薄弱児群との間のGCR%の平均の差は、1%水準で統計的に有意であることがみられる。GCRとは Group Conformity Rating の略であって、個人の欲求

不満場面での行動乃至反応様式が普通一般集団に於いて個々人の示す反応と合致しているか否かを示すものであり、集団一致度または正常反応との合致率と考えていい。しかもこれは、低年齢層から年を追って高まって行く傾向にあることが明らかになっており、その意味で、年齢発達に伴う社会性の発達と密接な関係にある。従って被験者の欲求不満に際しての反応が、その被験者の年齢に相応したものであるかどうか、換言すれば社会適応性はどうかということが、このGCR%によって吟味される⁵⁹⁾。云うまでもなく、その様な場合に於いても、超自我阻害場面での合致と、自我阻害場面での合致の両者を問題にすべきであるが、ここでは、一応GCR%全体として、両群の間に何らかの差があるかどうかを検討した結果では、上述の如くになっており、従って精神薄弱児群に於いては、正常児群に比して、欲求不満事態での社会的適応行動がより一層とりにくいことが示唆されている。この事実は、日常観察に於いてみられ

第9表 正常児群及び精神薄弱児群のP-F反応の平均値による比較

項目	M・σ	群 正常児群 (N=32)		精神薄弱児群 (N=45)		t
		M	(σ)	M	(σ)	
GCR %		47.0	(15.3)	37.1	(14.8)	2.852**
E'		1.3	(1.05)	3.7	(1.14)	9.412***
E		5.3	(3.84)	6.0	(3.23)	0.866
e		3.3	(1.74)	3.4	(2.25)	0.211
E %		46.3	(17.8)	58.2	(19.2)	2.761**
I'		1.2	(0.95)	1.1	(0.98)	0.481
I		4.0	(2.41)	2.6	(2.48)	2.469*
i		1.0	(0.76)	1.1	(0.57)	0.660
I %		26.7	(12.8)	20.5	(9.8)	2.406*
M'		1.7	(1.46)	1.6	(1.42)	0.301
M		2.5	(1.53)	1.5	(1.47)	2.890**
m		2.1	(1.55)	1.9	(1.39)	0.593
M %		27.4	(10.8)	21.7	(11.3)	2.223*
O-D %		22.0	(11.3)	27.1	(10.8)	2.008*
E-D %		51.2	(14.2)	44.4	(14.4)	2.054*
N-P %		27.1	(8.9)	27.9	(9.1)	0.384
E %		6.3	(6.0)	3.4	(3.1)	2.762**
I %		4.9	(4.6)	2.5	(2.3)	3.011**
E + I %		11.3	(6.9)	5.9	(5.2)	3.913***
E - E %		16.8	(13.4)	23.6	(13.7)	2.166*
I - I %		12.0	(8.7)	8.7	(7.4)	1.793
M + I %		31.5	(12.6)	26.3	(12.3)	1.810

(註)***は0.1%水準、**は1%水準、*は5%水準で夫々有意であることを示す。

る精神薄弱児の行動と比較的よく対応しているが、P-F Study に対する反応様式に於いても亦、そのことが明らかに示されていると考えられる。以下は詳しく詳細にその事を検討してみよう。

(ii) E系統の反応について、

E%は、正常児に於いては46.3%、精神薄弱児では58.2%で、その間には統計的に有意な差が認められる。E%のかかる有意差は、その内容をみてみると、E'-反応の差に起因していることが解る。即ち、正常児群では1.3、精神薄弱児群では3.7であって、両者間には、0.1%水準で有意な差が認められる。E'-反応は、欲求不満の事態に遭遇して、それを強調し、不平、不満乃至失意、失望を表明するが如き反応を指している。従ってこれは、本来はE-反応として出すべきものを禁止して、(Rosenzweig²⁶)はE'-反応のことを“extropeditive”という言葉で表現しているが、これは、元来、Eとして出す反応を制止亦是抑止して、E'で表明するということに、そこに多少とも禁止的傾向の働いていることを意味するもののようである。) E-反応で表明している場合が主体をなしているようであるが、ここでのような場合には、そのような解釈では妥当ではなく、むしろ次の様に解した方が至当ではないかと思われる。即ち、欲求不満事態に直面した際、精神薄弱児では、言葉を通しての欲求不満事態への表明においても未分化性が前面に出て、本来はE-反応として表明するべきものが、そこまで発展せずに、即ち充分な外罰的自己防衛反応にまで到らずに終わってしまう反応の多いことをほのめかしているのではないだろうか。そこで精神薄弱児群の反応をみると、例えば場面6（お前の様な小さい子は遊んでやらないよ。）に対しても、正常児では、「お母ちゃんに言いつけてやる。」(E),「お前こそ弱虫だ。」(E),「おまえなんか負けるものか。」(E)「僕は小さくないよ。お前達の方が小さいよ。」(E:E)のように反応すべきところを、精神薄弱児ではそこまでの反応に到らず、「僕泣く。」(E'),「かなん(困ったことだの意味).」(E'),「いやや!!」(遊んでくれないと困るの意味)(E')の反応様式に終始することが多い。この様に精神薄弱児においては、反応様式の未熟さ、未分化性などに起因して、E'-反応が正常児よりも多くなると考えられる。E-反応及びe-反応は、両群の間に統計的に有意な差は認められなかった。

(iii) I系統の反応について

I%全体としては、有意な差をもって精神薄弱児群よりも正常児群に高い。そしてこれは、I-反応の両群における差に原因していることが認められる。即ち、欲求不満事態に陥ったとき、正常児では、精神薄弱児

よりも内省や自己反省乃至自己批判の念が認められることを物語っている。いいかえれば、精神薄弱児においては、正常児よりも自己洞察力の欠如していることが目立っていることがうかがえる。I-反応に働く防衛機制は、Rosenzweigによれば、置換え(displacement)であるとされている。即ち、欲求不満事態に際して他者を処罰することを恐れる自我がはたらき、そのために、罪を相手に投射せず、自己に置換えることによって自己を防衛するものである。このような心理的機制が働くから、自責、自己批難の気持の強さに関係するものであるとされ、これが正常児よりも、精神薄弱児において乏しいことは、日常生活での彼等の行動と対応していると見做しているのではなからうか。

(iv) M系統の反応について

M%は、精神薄弱児よりも正常児において、有意に高いことがうかがわれる。そして、それはM-反応の差に依存していることがわかる。M系統の反応は、一般的には、他者から、“わけへだて”をされること即ち疎隔(alienation)を恐れる自我と、愛情護得への欲求との二律排反的な葛藤の故に、自己を防衛するための機制としては、自己欺瞞を伴った抑圧(repression with self-deception)となるとRosenzweigは云う。このような抑圧、換言すれば欲求不満事態への妥協(compromise)が、精神薄弱児において貧困であることは、上述のE及びI系統の反応の場合と同様、精神薄弱児が正常児に比して、同一のM.A.であっても、情緒的または人格的に、より未成熟であり、未分化な状態に止まっていることを暗示している。

(v) 反応の型及び超自我因子について

反応の型という見地からすれば、第9表のO-D%, E-D%及びN-P%にみるように、両群間では、前二者に統計的に有意な差が認められる。このうち、O-D%については、既に述べたようにE'-反応が影響していることが明らかなであるし、E-D%に関しては、両群間の有意差を殊にI-反応、及びM-反応に帰着させることが出来ることも亦上述の如くである。

ところで、超自我因子に関しては、興味の深い結果を見る事が出来る。即ち、E%及びI%は共に正常児の方が高く(1%水準で有意)、従ってE+I%も正常児に高い結果となっている。思うに、E-反応及びI-反応は両者共に、自己が他者から直接批難されることによって欲求不満に陥れられたときに、「自分の所為ではない」「僕がやったのではない」「何れもE」とか「実はこれこれの理由があって……」「自分がたしかに悪かったけれども、本当は斯く斯くのわけがあったのだ」「何れもI」というように、何れにしても、自己の立場を弁解するものである。斯様な自己弁

護的な反応が未分化で未成熟な精神薄弱児には出来難いということが暗示されており、単に「馬鹿野郎!!」とか「えらそうにいうな!!」と反応する如き情緒表出のあらわな純粹のE-反応(E-E%)が、正常児に比して多いということも同時に示唆されているのであって、同一M.A.であっても、精神薄弱児では言い訳や自己保身的な反応の困難であることが示されており、個体内に於ける人格の力動的な関係性も亦単純であることがうかがえ、超自我の未発達を物語っている。

このように、M.A.を統制しても、正常児と精神薄弱児との間にはP-F反応に相異がもたらされるとすれば、知的な要因以外に尚且つ人格の乃至情緒的な側面に於いて相異のあることがほのめかされている。即ち、環境または欲求不満事態への知的適応において、同一M.A.の正常児と精神薄弱児とは差異がないとしても、情緒的、人格的適応において恐らく違いがあるであろうことが推定される。

ところで、このように欲求不満事態への、人格的適応に於ける正常児との間の相異は、すべての精神薄弱児について、一般的に云い得ることであろうか。過去に於ける脳損傷の有無などによって反応の様式が可成り変わるのではないかと予測がなされる。斯くして、仮説Ⅲの如く類型による検討が要請されることになるだろう。

仮説Ⅲの検証

仮説Ⅱの検証によって、知的要因を統制しても、尚正常児と精神薄弱児との間には、欲求不満事態への反応様式に違いのあることが明きらかとなったが、この相違が精神薄弱児の類型に依存するか否かを更に吟味することが仮説Ⅲを検証するための目的である。

方法

被験者：仮説Ⅱの検証に用いたM.A. 5～6才の正常児32名、及び同じくM.A. 5～6才の精神薄弱児45名。この精神薄弱児のうち、家族性単純及び脳障害による知能の劣弱であることが極めて明確である者を夫々9名ずつ選択して、内因性及び外因性による精神薄弱児のP-F反応の相違を吟味する対象とした。それらの被験者は詳細には第10表の如くである。C.A., M.A.及びI.Q.は何れも中間値テストの結果、内因性群と内因性群との間に有意差は認められず、経済状態についても亦有意差はなかった。また上述45名の精神薄弱児の中から、出産時及び生後に病歴のないことが判明している者を20名選んで、これを正常児群と比較することにした。

手続：仮説Ⅰ及びⅡの検証の場合と同様。

結果及び考察

(i) 内因性(家族性単純)群と外因性(脳障害)群

第10表 内因性(家族性単純)及び外因性(脳障害)精神薄弱児一覧表

	児童	C.A.	M.A.	I.Q.	原因及び身体障害	職 業	経済家族 状態人数	順 位	教育的環境	
内因性(家族性単純)	1	11: 7	6: 10	62	家族性単純	日 雇	下下	11	4 男	放任的
	2	10: 2	6: 10	67	同 上 皮膚疾患多し	不 明	下下	8	長女	放任, 父飲酒多し
	3	11: 4	6: 8	59	同 上	不 明	中	5	長女	普通
	4	10: 5	6: 6	67	同 上	マッサージ	下下	4	2 男(末子)	生活保護, 環境悪
	5	8: 10	6: 3	71	同 上	日通職員	中下	6	3 男(末子)	普通
	6	10: 11	6: 0	59	同 上	飲 食 店	中下	7	長女	環境悪, 葛藤家庭
	7	9: 4	5: 10	67	同 上	大工手伝	下中	4	長男(末子)	環境悪,
	8	10: 1	5: 10	57	同 上	洋服仕立業	中下	6	2 男(末子)	環境悪, 母劣等感
	9	11: 2	5: 6	57	同 上	家内工業	下中	3	長男(一人子)	普通
外因性(脳障害)	①	10: 3	6: 8	69	脳性小児麻痺, 言語障害	袋物加工	中	4	次男(末子)	放任的
	②	7: 5	6: 7	62	脳性小児麻痺, 手足不全	靴 職 人	下下	6	長男(末子)	環境悪
	③	12: 1	6: 3	51	脳性小児麻痺, 麻痺殆どなし	工 員	中	5	長女	普通
	④	11: 1	6: 0	57	動作緩慢 症候性てんかん(疫痢による)	教 授	中上	5	2 男(末子)	過保護, 環境良
	⑤	12: 0	5: 10	57	脳性小児麻痺	会社員	上	3	長男(一人子)	環境良
	⑥	11: 10	5: 8	48	頭部打撲による脳障害, 肢体不自由	医 師	中	5	長女(一人子)	父厳格
	⑦	11: 10	5: 6	49	脳性小児麻痺	吏 員	中下	4	3 男(末子)	環境やや悪
	⑧	9: 11	5: 3	53	生後間もなく腋下淋巴線手術, くちなして手術	電報配達員	中下	5	2 男	普通
	⑨	12: 6	5: 0	40	脳性小児麻痺, 脊髄性麻痺	無 職	中下	5	長女(末子)	普通

(註)①職業以下の項目は担任から提供して頂いたものである。

②C.A., M.A., I.Q.の中間値は内因性：外因性で夫々10才5月：11才10月, 6才3月：5才10月, 62:53で中間値テストの結果有意差なし。経済状態にも有意差なし。

との比較

P-F Studyにみられる反応は第11表の如くであって、内因性精神薄弱児と外因性精神薄弱児との間には、先の仮説Ⅱの検証の場合とほぼ同様の傾向が示されていると云える。比較的典型的な内因性（ここでは家族性単純を主体としている）精神薄弱児と、それと対比し得る典型的な外因性（主として脳性小児麻痺が多いが、多少とも肢体不自由、症候性てんかん、脊髄性麻痺を含んでいる）精神薄弱児を抽出するように意図したが、未だ充分とはいえず、また被験者数も少数であるために、統計的検定においても仮説Ⅱの場合程には有意水準を厳密にせず、一応傾向を見るに止めたものもある（第11表の下欄の註を参照のこと）ことを付言しておく。このような考慮の下に第11表から内因性の精神薄弱児と外因性の精神薄弱児とを比較すると

第11表 内因性群と外因性群のP-F 反応の平均値による比較

	内因性 (N=9)	外因性 (N=9)
GCR%	49.8	29.7*
E'	2.3	5.7*
E	4.8	5.7
e	2.9	4.1
E %	43.1	71.3**
I'	1.1	0.8
I	4.4	1.6**
i	1.6	0.3
I %	30.9	11.9**
M'	1.5	1.4
M	2.7	1.0*
m	1.8	1.3
M %	26.0	10.9**
O-D %	21.6	35.6†
E-D %	51.5	38.9†
N-P %	27.3	25.7
<u>E</u> %	6.1	3.6†
<u>I</u> %	3.3	1.2†
<u>E + I</u> %	9.4	4.8†
<u>E - E</u> %	14.7	24.1†
<u>I - I</u> %	16.0	5.9**
<u>M + I</u> %	29.8	18.1†

(註)①本表は、平均値によって示されているが、人数が少ないので、検定に際してはノンパラメトリック法によるT-検定を用いた。

②*は5%水準、**は1%水準で両群間に夫々有意差のあることを示し、†は5～10%水準で有意な差のある傾向を示すに止まる。

き、GCR%にみられるように、外因性精神薄弱児の方が社会的適応においてより劣っており、それが、I %の低さ、中就、I-反応の低さやM %の低さ、殊にM-反応の低さに起因していると考えられるとともに、E %の高さ、特にE'-反応の高さにも原因していることが予想される。即ち、外因性の精神薄弱児では、内省力に乏しく、且つ亦、欲求不満事態に直面して、自己を抑圧したり妥協したりすることの少ないことがうかがわれ、比較的衝動的行動に趨き易い傾向にあることが考えられる。そしてこのことは日常生活における外因性精神薄弱児の行動様式とも比較的对応すると思われる。また、外因性精神薄弱児では本来は自己を主張し、相手の非を指摘したい場合にも、外見的には、不満、失意の表明としか受けとれない反応をする場合があるが、これは言語表出の不充分さ、思うままに表現出来ないことなどに帰着させてよいのではないかと思われるのである。

同時に、外因性精神薄弱児の自我の未成熟さ、未分化性などを暗示する指標として、E、I、E + IをはじめM + Iにも見られるように、超自我の在り方を吟味する所謂超自我因子の評点が内因性精神薄弱児に比して一般に低い傾向にある。このことは、内因性及び外因性の精神薄弱児夫々9名の家庭の経済状態には有意な差は認められなかったが、教育的環境は外因性精神薄弱児の方が一様に良好である者が多いと思われるにもかかわらず、尚且、超自我の発達の阻害がみられることから見て、教育心理学的にも意義ある事実を示唆していると考えられる。他方、この様に超自我因子の低いことは、先にも仮説Ⅱのところで考察した様に、EにしるIにしる、何れにしても、自己を弁解し弁護する反応であって、これが外因性の精神薄弱児には容易ではないことを物語っているのかも知れない。

その他、外因性精神薄弱児ではE - E（純粋のE-反応）が高く、I - I（純粋のI-反応）が低い傾向にあることから、先に考察したように本来的には四隅の状況や他者を考慮するというような余裕はなく、自己主張的、自己中心的であり、自己批判力の劣弱であることが示されている。O-D %の高さは、先にも触れたようにE'-反応の高いことに由来しており、E-D %の高さは、I-反応及びM-反応の高さに原因している故、再度言及することは避けたい。

かくして、外因性精神薄弱児に於ける個体内の力働性、内因性精神薄弱児に於けるそれとの間には、同じ精神薄弱児であり、しかもM.A.I.Q. 家庭の状況などを統制しても、尚且可成りの齟齬のあることがうかがえる。即ち人格的力働に喰い違いのあることがP-F反応から暗示されており、教育的実践に際しても類型

による配慮を等閑視すべきでないことが予測される。斯くして、Werner⁵¹⁾がLewin¹⁶⁾の所論に反駁したことも亦至当であろうと考えられる。

(ii) 正常児群と病歴なき精神薄弱児群との比較、

正常児と精神薄弱児とのP-F反応の相違即ち人格的力働の相違が精神薄弱児を類型化せぬ時にも見られたが、これを類型化してみると、主として外因性精神薄弱児に於ける歪みに起因することが明きらかとなった。それでは果たして内因性精神薄弱児においては、人格的には正常児に類似したパターンを持っているのであろうか。この点が明きらかにならなければ、外因性精神薄弱児のみの人格的歪みを強調することには早計の感がある。

斯かる目的のために、その証拠を得ようとしたのが第12表に見られる結果である。ここでは、先に被験者抽出の際に言及したように、病歴のないことが判明している精神薄弱児と正常児とを比較しているが、検定の結果は何れの反応項目に於いても有意な差を認める

第12表 正常児群と病歴なき精神薄弱児群とのP-F反応の平均値による比較

	正常群 (N=32)		病歴なき精神薄弱児群 (N=20)	
	M	σ	M	σ
GCR%	47.0	(15.3)	45.5	(16.0)
E'	1.3	(1.05)	2.4	(1.32)
E	5.3	(3.84)	5.4	(3.54)
e	3.3	(1.74)	2.9	(1.86)
E %	46.3	(17.8)	46.8	(18.0)
I'	1.2	(0.95)	1.0	(0.91)
I	4.0	(2.41)	4.0	(2.36)
i	1.0	(0.76)	1.5	(0.89)
I %	26.7	(12.8)	28.0	(13.9)
M'	1.7	(1.46)	1.7	(1.48)
M	2.5	(1.53)	2.2	(1.61)
m	2.1	(1.55)	2.0	(1.58)
M %	27.4	(10.8)	25.8	(11.3)
O-D %	22.0	(11.3)	22.2	(10.9)
E-D %	51.2	(14.2)	50.5	(15.3)
N-P %	27.1	(8.9)	27.7	(9.5)
E %	6.3	(6.0)	4.0	(3.8)
I %	4.9	(4.6)	4.1	(3.9)
E + I %	11.3	(6.9)	8.1	(7.1)
E - E %	16.8	(13.4)	19.6	(14.7)
I - I %	12.0	(8.7)	13.3	(7.9)
M + I %	31.5	(12.6)	30.2	(13.5)

(註) 1-検定の結果は何れも有意な差は認められなかった。

ことは出来なかった。また、第11表の内因性精神薄弱児の反応と、第12表の正常児群のそれとを比較しても（これは検定はなされていないので充分なことは云えないが）左程大きな齟齬が見出されないのである。このような事実からみて、出産時乃至出生以後に何等病歴のない精神薄弱児や家族性単純精神薄弱児に於いては、知的劣弱が顕著である以外には、少なくともP-F Studyによる反応を通してみた人格的特徴としては著明な差が認められないということが考えられる。

以上仮説Ⅲの検証に当って(i)及び(ii)の如き比較を試みた訳であるが、この二つの比較検討から、内因性精神薄弱児（ここでは主として家族性単純及び、出産時乃至出生以後に脳損傷をこうむるような顕著な病歴のない者をいう）と外因性精神薄弱児とではP-F反応に於いて、前者は比較的正常児に近い反応パターンを示すのに対し、後者ではその歪みが可成り顕著であることが明きらかとなった。但し、この事実は正常児も精神薄弱児もともにM.A. 5～6才の児童に限って検討してみた結果であるから、それよりも年長児についてもこのことが言えるかどうかは今後吟味してはならないし、またそれよりも年少児についてはP-F Studyの適用は一応不可能であることが仮説Ⅰの検証からいえたから言及しない。

結論及び要約

従来の精神薄弱児に関する人格の研究は、要素主義的であるか、または全体としての人格の研究がみられるにしても、個体内の人格的力働性に接近しているものが見受けられないように思う。この研究はそれに接近するために、理論的にも亦方法論的にも適切と思われるRosenzweigのP-F Studyを用いて、特に問題とされている精神薄弱児の類型化を通して見ていこうとするものである。それに先立って、P-F Studyの精神薄弱児への適用が可能か否かの問題を検討したところ、M.A. 5才以上であれば可能であることが明きらかとなった。M.A. 4才では通過率は半々である。

そこで、実際に精神薄弱児に適用してみたところ、正常児との間には、M.A.の統制がなされていてもP-Fの反応パターンに可成りの相違のあることが見出された。この相違は何に依存するかを吟味するために、内因性精神薄弱児と外因性精神薄弱児に分類してP-Fの反応を検討してみると、内因性精神薄弱児は比較的正常児に近い反応様式を示すのに対し、外因性精神薄弱児では相当に喰い違いがみられた。このことから、同じ精神薄弱児であって、知的水準が同一程度であっても、人格的乃至情緒的な歪みは外因性の者の方が、内因性の者より顕著であって、Lewisが内因性を低文化型、外因性を病理型といい、Sarasonが前者を雑草

型、後者を脳障害型と表現したのは興味深いことのように思われる。即ち、外因性精神薄弱児は欲求不満事態に遭遇すると、一般にいわれているように、P-F反応においても、自己の情緒の統制や情緒の表現の抑制が困難であり、自己反省心、内省力に乏しく、超自我の発達も、より不充分であって、全体としては比較的未分化で衝動的な行動をとりやすく、人格的に未成熟な傾向がうかがえる。

これらの事実は精神薄弱児の一般的乃至平均的傾向として見出されたものであって、今後は、個々の精神薄弱児について更に詳細に個体内での人格の精神的力働性を検討することが要請されるとともに、例えば超自我因子において、著しい差がみられているので、欲求不満場面であっても、超自我阻害場面と自我阻害場面とで、場面の認知や反応に正常児、内因性精神薄弱児、外因性精神薄弱児でどのような違いがあるかなど、より仔細な研究を必要とするであろう。P-F Studyの反応を通して、精神薄弱児を類型化することには多くの問題があるとしても、類型化された精神薄弱児を“個人”として把握し、個体の精神力働性を探索して、そこから精神薄弱児の全体としての人格的特徴や人格の力働を確めることは、精神薄弱児の教育実践の上からみても、教育心理学的に重要な意義を持つものと思う。本研究はP-F Studyを通じて精神薄弱児の人格を究明する一貫した研究への一つの出発点となるものである。

参 考 文 献

- 1) Abel, T. M. Responses of Negro and white morons to the Thematic Apperception Test. *Amer. J. ment. Defic.* 1945, 49, 463-468.
- 2) Beck, S. J. The Rorschach test as applied to feeble-minded group. *Archives of Psychology*, 1932, No. 136.
- 3) Binet, A., and Simon, T. Sur la nécessité d'établir un diagnostic scientifique des états inférieurs de l'intelligence. *Année psychol.*, 1905, 11, 163-190; The development of intelligence in children. Baltimore: Williams and Wilkins, 1916.
- 4) Burt, C. The backward child, 4th ed. London: Univ. London Press, 1958.
- 5) Cruse, D. B. The effects on distraction upon the performance of brain-injured and familial retarded children. In Trapp, E. P. and Himelstein, P. (eds.) *Readings on the exceptional child: research and theory*. New York: Appleton-Century-Crofts, 1962, 492-500.
- 6) Dolphin, J. E. and Cruickshank, W. M. The figure-background relationship in children with cerebral palsy. *J. clin. Psychol.*, 1951, 7, 228-231.
- 7) Goldstein, K. After-effects of brain injuries in war. New York: Grune and Stratton, 1942.
- 8) Goldstein, K. Concerning rigidity. *Charact. and Pers.*, 1942-43, 11, 209-226.
- 9) Goldstein, K. and Scheerer, M. Abstract and concrete behavior. An experimental study with special test. *Psychological Monographs*, 1941, 53, No. 2.
- 10) Harrison, R. Studies in the use and validity of the Thematic Apperception Test with mentally disordered patients. II. A qualitative study; III. Validation by the method of "blind analysis" *Charact. and Pers.*, 1940, 9, 122-138.
- 11) Kounin, J. S. Experimental studies of rigidity. I. The measurement of rigidity in normal and feeble-minded persons. *Charact. and Pers.*, 1941, 9, 251-273.
- 12) Kounin, J. S. Experimental studies of rigidity. II. The explanatory power of the concept of rigidity as applied to feeble-mindedness. *Charact. and Pers.* 1941, 9, 273-282.
- 13) Kounin, J. S. The meaning of rigidity: a reply to Heinz Werner. *Psychol. Rev.*, 1948, 55, 157-166.
- 14) Kounin, J. S. Intellectual development and rigidity. In Barker, R. G., Kounin, J. S., and Wright, H. F. (eds.) *Child behavior and development*, New York: McGraw-Hill, 1943, 179-198.
- 15) Kutash, S. B. Performance of psychopathic defective criminals on the Thematic Apperception Test. *J. crim. Psychopathol.*, 1943, 5, 319-340.
- 16) Lewin, K. A dynamic theory of personality. New York: McGraw-Hill, 1935.
- 17) Lipman, R. S. Some test correlates of behavioral aggression in institutionalized retardates with particular reference to the Rosenzweig - Picture - Frustration - Study. *Amer. J. ment. Defic.*, 1959, 63, 1038-1045.
- 18) O'Connor, N., and Hermelin, B. Discrimination and reversal learning in imbeciles. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1959, 59, 409-413.
- 19) Pintner, R. Intelligence testing. Univ.

London Press, 1924.

20) Plenderleith, M. Discrimination learning and discrimination reversal learning in normal and feeble-minded children. *J. genet. Psychol.*, 1956, 88, 107-112.

21) Rorschach, H. *Psychodiagnostics*. New York : Grune and Stratton, 1942.

22) Posenzweig, S. A general outline of frustration : Frustration as an experimental problem. *VI. Charac. and Pers.*, 1938, 7, 151-160.

23) Rosenzweig, S., Fleming, E. E., and Rosenzweig, L. The children's form of the Rosenzweig Picture-Frustration Study. *J. Psychol.*, 1948, 26, 141-191.

24) Rosenzweig, S. Projective methods and psychometric criteria : a note of reply to J. P. Sutcliffe. *Aust. J. Psychol.*, 1956, 8, 152-155.

25) Rosenzweig, S. The place of the individual and of idiodynamics in psychology : a dialogue. *J. individ. Psychol.*, 1958, 14, 3-21.

26) Rosenzweig, S. The Rosenzweig Picture-Frustration Study, Children's Form. In Rabin, A. I., and Haworth, M. R. (eds.) *Projective techniques with children*. New York : Grune and Stratton, 1960.

27) Rotter, J. B. Studies in the use and validity of the Thematic Apperception Test with mentally disordered patients. I. Method of analysis and clinical problems. *Charac. and Pers.*, 1940, 9, 18-34.

28) Sarason, S. B. The use of the Thematic Apperception Test with mentally deficient children. I. A study of high grade girls ; II. A study of high grade boys. *Amer. J. ment. Defic.*, 1943, 47, 414-421 ; 1943, 48, 169-173.

29) Sarason, S.B., and Sarason, E.K. The discriminatory value of a test pattern in the high grade familial defectives. *J. clinic. Psychol.* 1946, 2, 38-49.

30) Sarason, S.B. and Sarason, E.K. The discriminatory value of a test pattern with cerebral palsied, defective children. *J. clinic. Psychol.* 1947, 3, 141-147.

31) Sarason, S.B. and Gladwin, T. *Psychological problems in mental deficiency*, 3rd ed. New York : Harper and Brothers, 1959.

32) Sloan, W. Mental deficiency as a

symptom of personality disturbance. *Amer. J. ment. Defic.*, 1947, 52, 31-36.

33) Sloan, W. Prediction of extramural adjustment of mental defectives by use of the Rorschach test. *J. consult. Psychol.*, 1948, 12, 303-309.

34) Sloan, W., and Guertin, W.H. A comparison of H-T-P and Wechsler-Bellevue I. Q.'s in mental defectives. *J. clinic. Psychol.* 1948, 4, 424-426.

35) Spache, G. D. Personality characteristics of retarded readers as measured by the Picture-Frustration Study. *Educ. psychol. Measmt.* 1954, 14, 186-192.

36) Spitz, H., and Blackman, L. A comparison of mental retardates and normals on visual figural aftereffects and reversible figures. *J. abnor. soc. Psychol.*, 1959, 58, 105-110.

37) Stevenson, H., and Zigler, E. Discrimination learning and rigidity in normal and feeble-minded individuals. *J. Pers.*, 1957, 25, 699-711.

38) Strauss, A. A. Typology in mental deficiency : its clinical, psychological and educational implications. *Amer. J. ment. Defic.*, 1939, 44, 85-90.

39) Strauss, A.A., and Werner, H. Disorders of conceptual thinking in the brain-injured child. *J. nerv. ment. Diseases*, 1942, 96, 153-172.

40) Strass, A.A., and Werner, H. Comparative psychopathology of the brain-injured child and the traumatic brain-injured adult. *Amer. J. Psychiat.* 1943, 99, 835-838.

41) Strauss, A. A., and Lehtinen, L. E. *Psychopathology and education of the brain-injured child*. New York : Grune and Stratton, 1947.

42) Thorndike, E.L., and others. *The measurement of intelligence*. New York : Teachers College, Columbia University, 1926.

43) Tredgold, A.F. *A textbook of mental deficiency*, 7th ed. Baltimore : Williams and Wilkins, 1947.

44) Weatherwax, J., and Benoit, E. P. Concrete and abstract thinking in organic and non-organic mentally retarded children. *Amer. J. ment. Defic.*, 1957, 62, 548-553.

45) Werner, H., and Strauss, A.A. Types of visuo-motor activity in their relation to

low and high performance ages. Amer. J. ment. Defic., 1939, 44, 163-168.

46) Werner, H., and Strauss, A.A. Causal factors in low performance. Amer. J. ment. Defic. 1940-1941, 45, 213-218.

47) Werner, H. Comparative psychology of mental development. New York: Harper, 1940.

48) Werner, H., and Strauss, A.A. Pathology of figure-background relation in the child. J. abnorm. soc. Psychol., 1941, 36, 236-248.

49) Werner, H. Perceptual behavior of brain-injured, mentally defective children: an experimental study by means of Rorschach technique. Genet. Psychol. Monog., 1945, 31, 51-110.

50) Werner, H. Abnormal and subnormal rigidity. J. abnorm. soc. Psychol., 1946, 41, 15-24.

51) Werner, H. The concept of rigidity: a critical evaluation. Psychol. Rev., 1948, 53, 43-53.

52) Woodrow, H.H., and Lowell, F. Some data on anatomical age and its relation to intelligence. Ped. Sem., 29, 1922.

53) Yannet, H. Diagnostic classification of patients with mental deficiency. Amer. J. Diseases of Children, 1945, 70, 83-88.

54) Zigler, E., Hodgden, L., and Stevenson, H. The effect of support on the performance of normal and feeble-minded children. J. Pers., 1958, 26, 106-122.

55) Zigler, E. Social deprivation and rigidity in the performance of feeble-minded children. J. abnorm. soc. Psychol., 1961, 62, 413-421.

56) Zigler, E. Rigidity in the feeble-minded. In Trapp, E.P. and Himmelstein, P. (eds.) Readings on the exceptional child: research and theory. New York: Appleton-Century-Crofts, 1961, 141-162.

57) 林 勝造：ローゼンツァイクP-Fスタディ解説手引書，P-F研究会，1955(昭30)。

58) 芝 敬一：精神薄弱児に対するP.F.T.実施結果の一考察，日本心理学会第22回大会発表，1958(昭33)。

59) 住田勝美，林 勝造：ローゼンツァイクP-Fスタディ使用手引（絵画欲求不満テスト），

児童用・成人用，京都，三京房，1962(昭37)。

60) 住田勝美，林 勝造，一谷 彊：ローゼンツァイク人格理論，京都，三京房，1964(昭39)。

Summary

This study was to discuss (i) the applicability of the Children's Form of the Rosenzweig Picture-Frustration Study to the feeble-minded childrens, (ii) the differences of the reactions to the P-F between the normal group and the feeble-minded, and (iii) the differences of the reactions to it between the endogenous feeble-minded group and the exogenous.

The following significant and remarkable findings were obtained from this study:

(i) The P-F Study was applicable to the feeble-minded childrens whose M.A.'s were at 5 year age level or more.

(ii) In comparison with the P-F reaction patterns of the normal group, those of the feeble-minded dominantly distorted in various directions.

(iii) While there was a close resemblance between the P-F reaction patterns of the endogenous defective group and the normal, the exogenous defective group showed the quite different and strikingly distorted reaction patterns from the above two groups.

Thus, through the reactions to the Picture-Frustration situations, it was found that the personality distortions of the exogenous feeble-minded childrens were more definitely distinguishable from the endogenous. In other words, from the differences of the P-F profiles between the endogenous group and the exogenous, it was predicted that the children of the latter group would behave less maturely and less differentiatedly than the former. It was also inferable that, in frustration situation, the exogenous feeble-minded children are not so much self-reflective and repressive as the endogenous, and are more confused and more impulsive. The evidence which the present study offered will be significant and important in educational practice of the endogenous and the exogenous feeble-minded children.